



本文章の出典は下記です。引用の場合は明記願います。
玄野武人「性被害者へのインタビュー」、『WCK・NEWS』（2006年4月第10巻第38号、発行・ウイメンズカウンセリング京都）所収



「性被害者へのインタビュー」

玄野 タケト（男性サバイバー）

ホームページ: [If He Is Raped.](http://www.comcarry.net/~genbu/index.html)
<http://www.comcarry.net/~genbu/index.html>

性虐待をうけた男性（男性サバイバー）のための自助グループを、2001年からはじめて6年目を迎えました。日本でも一部の人のあいだとはいえ、ようやく少年や男性も多数が性虐待にあっていることが理解されるようになってきました。今後の日本の課題としては、性虐待に関する各種の統計・調査の積み重ねが必要な段階に来ているといえるでしょう。それも女性も男性も等しく調査対象とした本格的な統計や調査が必要だと思えます。しかし、性被害者に対する調査・研究・インタビューには、さまざまに注意すべき点があります。くわえて、日本では性被害者へのインタビューにおける倫理や安全に関するガイドラインが確立していないので、きわめて慎重に行わねばなりません。ここでは専門職や研究者による面接や電話を使った「インタビュー」を念頭において、当事者として私が気づいたことの一端を紹介しましょう。

性被害者がインタビューに応じようとする場合、実にさまざまな戸惑いや危険が生じます。虐待の記憶を思い出すことの苦痛、自分のプライバシーが研究材料にされることへの不安、セックスなど性にまつわることを話さなくてはならないことへの戸惑い、自分の体験を性暴力の克服に役立ててほしいという使命感を感じる一方で、既往の心の傷が悪化するのではないかと心配などがそれです。したがって、インタビューにおける「安全と安心の確保」は、調査側が最大限配慮しなくてはならない絶対の条件となります。いうまでもなく、医療者や研究者などの専門職がおこなう検査・調査などの責任と倫理は、全面的に調査研究する側が負わねばならないことは、精神医療でも一般医療でも変わりありません。それから、上述のような被害者の戸惑いや危険を調査員に追体験してもらうために、調査員自身のセックスの体験を互いにインタビューしあうという

トレーニングを通じて、性被害者の気持ちを疑似体験してみるという方法を、私は提案しています。

調査員は2人で組んで、1人は質問する役を、もう1人はインタビューを受ける役を演じます。質問をする役の人には、「初めてのセックスはいつでしたか」「その時の気持ちは？」「自慰ほどのくらいの頻度でしますか」などと数種類の質問をします。この時、質問された側は、けっして答えてはなりません。調査員といえども自分の性的なプライベートを開示することはトラブルのもとになるので、このことは必ず守ってください。ここで感じてほしいのは、質問をする時、もしくはされた時、どんな気持ちになったかを調査員同士で話し合ってもらいたいのです。

このようなトレーニングを通じて、自分の性的なプライバシーが研究という名目で公開されることや、性的なことを語るさいの困惑などを感じてほしいと思います。さらに、質問するとき何に注意しなくてはならないのか、安全はどうやって確保するのか、あるいはより細かな注意として、どんな声のトーンで尋ねるのが良いか、時間帯は昼か夜か、場所はどこが良いか、インタビューアの性別は男性か女性かなど、いろいろな角度から被害者の気持ちを想像しながら話し合ってみます。なお、注意を惹起しておく、性虐待は暴力であるが、調査員の語っていることは愛情にもとづくセックスであるという違いはしっかり認識しておいてください。トラウマの記憶を語るのと、通常の思い出を語るこの違いも学んでおいてください。

さて、話題を変えて、女性の性被害者にインタビューする場合と、男性の性被害者にインタビューする場合に、何か違いがあるのでしょうか。実はいくつか配慮しなければならないことがあります。

そもそも、男性の性虐待の実態を調査するにあたり、男性に「レイプされたことがありますか？」「性虐待にあっていますか？」と尋ねたところで、「イエス」と答える男性は現時点ではほとんどいないでしょう。したがって、「意に反した性交を強要され

たことがありますか？」などと洗練された質問の仕方をしていただければ、実態を反映した調査とならないことはいうまでもありません。

女性の性虐待にくらべ、男性の性虐待を強固に否定したり嘲笑したりする社会では、女性被害者と同じ質問を男性にすると、男性を暗に責める結果となり、したがって男性被害者の快復を妨げかねないことが往々にして起きます。また、研究者や調査員はとくに女性にはしない質問を、男性の被害者にしたがる傾向があります。たとえば、同性愛者であるか異性愛者であるかといった性的指向性や、加害行為の有無などを知れたら、これらの質問もまた何の配慮なく発せられると、被害者を傷つける可能性があります。これらの質問は、「男性から性被害を受けた少年はみな加害者になる」「性被害を受けた少年はみな加害者になる」という「神話」(性虐待に関する誤った情報)がもとになって発せられるようです。私たちサバイバーは互いに多くの仲間と話し合ってきた経験から、これらが事実を正確に反映していないことを知っています。しかし、逆にこの種の質問は、性虐待の実態・ジェンダー(特に「男らしさ」と性虐待の関わり・社会の偏見などを、学術的に明らかにするために必要であり重要な質問でもあります。

それでは、男性被害者の快復を妨げずにこのような質問をするには、どのような工夫がありうるでしょうか？ その解決策の一つは、1問ごとに「次の質問はあなたの落ち度を指摘するものではなく、実態の解明のために必要なのです」などと確認したり、あるいは事前に男性性虐待の「神話と事実」についてレクチャーをしたりしておくことです。

それから、男性に対する専門的サポートが女性にくらべたら絶対的に不足している、というよりも皆無とっていい状況も問題になります。インタビューで調子を崩した時に、調査側が何のケアの体勢も用意していなければ、サポートのない社会に被害者を放り出すことになりかねません。したがって、インタビューをする前に、調子を崩したときは誰がケアをするのか、その費用は誰が負担するのかを、あらかじめ取り決めておかねばなりません。

研究や調査にあたり、研究者は学術的好奇心や功

名心を抱いているものですが、そのような研究者のニーズを優先した場合は、ときにたいへん不健全な調査となります。調査やインタビューはなんといつても、被害者の安全を保障し、そしてなによりも性被害者をエンパワメントする目的で行われるべきなのです。

紙幅が尽きてきたので、私が気づいたその他の注意点をごく簡単に挙げておきます。

一般には、カウンセリングよりもインタビューの方が易しいように思われているふしがありますが、しかしインタビューは強制的に再体験させることがある上に、カウンセリングのような援助構造をもたないため、インタビューのほうが難しいと思っておいたほうが良いでしょう。優秀な精神科医やカウンセラーなどの治療者といえども、そのまま優れたインタビューアーになれるわけではありません。

また、性被害者にとって性的な快復は重要なテーマですが、もし調査側が性被害者の性的な諸問題に通じないままにこのテーマのインタビューをする、と、たいへんな危険な生じる可能性があります。

原則として、友人や家族など親しい関係の者同士でインタビューをしてはなりません。これはカウンセリングを親しい者同士で行うことが禁忌とされていることと同様です。

治療者自身が治療を担当しているクライアント、入院患者、未成年者の被害者へのインタビューは慎重でなければなりません。一概には言えませんが、原則的には、むやみに行わないほうが安全だと思います。

わたしたちサバイバーは、誠実で有能な調査員や研究者が登場してくることを切に願っています。それが性虐待を克服してゆくために必要なことであり、かつそのような調査研究に協力することもまたサバイバーの使命であると思っているからです。男性性被害について調査をしたいのであればその安全な方法について検討したいという方は、わたしのホームページから E メールをくだされば一緒に考えてみたいと思います。また、インタビューを受けようとするサバイバーの方にとって、上記が参考になれば幸いです。